

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	龍谷大学図書館蔵『保元物語』近世初期写本 翻刻（一）
Author(s)	広島大学日本語史研究会,
Citation	論叢 国語教育学 , 19 : 73 - 83
Issue Date	2023-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/54618
URL	https://doi.org/10.15027/54618
Right	
Relation	



龍谷大学図書館蔵『保元物語』近世初期写本 翻刻（一）

広島大学日本語史研究会

一 はじめに

ここに翻刻を開始する龍谷大学図書館蔵『保元物語』（写字台 913.39 / 3W）は、龍谷大学大宮図書館貴重書庫に蔵される、近世初期写の上下二巻本である。書名は、内題による。龍谷大学図書館貴重資料画像データベースに、全文のカラー画像が公開されている。その画像に見られるとおり、奥書は存しない。

本書は、上巻冒頭が「近來帝王まし／＼き」で始まり、下巻末を「保元のかせん（合戦）はふしぎ（不思議）なりし事ぞかし 伯父をきる平氏もあり ちゝをころす源氏もあり あるいは子にをくれて身をなくる母もあり あるいは主にわかれていのちをすつる郎従もあり 一かたならぬあはれは此時なりとぞ申ける」で結ぶ。

この本文を持つ諸本を、永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系31』（一九六一年、岩波書店）の「解説」は、「第三類」に分類した（一二頁）。その第三類の初めに挙げられた京都大学附属図書館蔵本（5-06ホ6（普））三巻三冊は京都大学貴重資料デジタルアーカイブで、同類で根津本と呼ばれる筑波大学附属図書館根津文庫旧蔵本（中央装ル 140-1）は筑波大学附属図書館ホームページで、全文の影印を閲覧可能である。また、同系本・早稲田大学図書館蔵本（へ

12-04581）三巻三冊も、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」で画像公開されるとともに、早稲田大学蔵資料影印叢書第十七巻『軍記物語集』にも収載されている。

これらの第三類における龍谷大学蔵本の位置づけについては、原水民樹「管見『保元物語』の伝本二、三」（『徳島大学総合科学部創立記念論文集』（一九八七年三月）所収）を、その他の写本については、原水民樹「『保元物語』写本目録稿」（『言語文化研究』6、一九九九年二月）、（同）補遺」（『言語文化研究』15、二〇〇七年十二月）（いずれも、『保元物語』系統・伝本考』（二〇一六年、和泉書院）所収）を御参照願いたい。

第三類・京都大学附属図書館蔵本は、早川厚一・弓削繁・原水民樹『京図本保元物語』（一九八二年、和泉書院）で、その全文が翻刻された。その校合に、第三類「京都大学国史研究室蔵本」「筑波大学蔵附属図書館蔵本（根津文庫旧蔵本）」が使用され、他諸本も参照されたものの、ここに翻刻する龍谷大学蔵本は、用いられなかった。

本書龍谷大学蔵本は、巻下の一行文字数が「京図本」よりも多く、全体墨付が十紙ばかり少ないため、上下二巻に収められている。本書の巻下巻頭は、「宇治入道大相國は新院の御方の軍やふられぬと聞

しかは」で始まる。これは、京図本・巻中の第35ウ五行目半ばに相当する（公開画像では、Image101of181の右から五行目である）。

この『保元物語』第三類の用語には、「俗語的表現」が見られるとの指摘がなされている（森井典男「保元物語」の形成と発展 ―「語りもの」の形成に関する一試論―（神戸大学文学部国語国文学会「国文論叢」8、一九六〇年五月））。

龍谷大学蔵本は、右の京図本同様、詳しい振り仮名が加添され、漢語の仮名書き例も多い。また、振り仮名や本文には、濁点を加添した例が豊富であり、他の第三類本よりも日本語史資料としての価値が高い。それにもかかわらず、全文の翻刻は未刊である。

そこで、広島大学日本語史研究会での輪読対象文献として選定し、毎週読み進めてきた。本稿では、巻上巻頭から第二十三丁までの翻刻を公表する。

翻刻のご許可を頂いた龍谷大学図書館に対し、心中より御礼申しあげる。
(以上、佐々木 勇 記)

凡例

一、本翻刻は、龍谷大学図書館蔵『保元物語』（写字台913.39 / 3W）を、原本の行取りで、現行の字体に改めたものである。仮名遣いも、原本のままとした。

一、促音・舌内入声音に使用される  は、「ツ」で示した。

一、虫損等で欠損した文字を残画から推読した場合は、「」に入れた。

一、本翻刻は、石田芽衣・稲熊詩帆・藤本愛捺・鹿島大吾・黒木裕梨香・館林佑樹・藤井日羽・日野綾香・研裕太・元山美乃里・村上愛

結・宮崎翔太・森双葉・堀邊隆晴・後藤結衣・荒尾佳澄・楊曉敏・松本佳子・源さちあで作成した。

なお、翻刻データの入力は、鹿島大吾・館林佑樹・藤井日羽・研裕太・元山美乃里が行い、佐々木勇が確認・修正した。

(一才)

- 1 保元物語上
 - 2 近來帝王まし／＼き御名をは鳥羽の禪ちやうほうわう
 - 3 定法皇とそ申ける天照大神四十六世のてんせうたいじん
 - 4 御す多神武天皇より七十四代の御門也堀じんむてんわう
 - 5 川天皇第一の王子御母贈 皇太后宮閑院かはてんわう
 - 6 の大納言実基卿の御むすめなり康和五なごんざねものききやう
 - 7 年正月十六日に御誕生同年八月十七日皇たいたし
 - 8 太子にたゝせ給ふ嘉承二年七月九日堀川天かせう
 - 9 皇かくれさせ給ふ同十九日御子五歳にして位くわい
- (二ウ)
- 1 につかせ給ふ踐祚御在位十六年の間海内しせんそ
 - 2 つかにして天下をだやか也風雨時にしたがひ寒ふうう
 - 3 暑おりをあやまたず御年廿一にして保安じよ
 - 4 四年正月廿八日御位をしりぞかせ給て第一の御くわい
 - 5 子崇徳天皇にゆつりたてまつらせ給ふ御しゆとくてんわう
 - 6 配流の後は讃岐院とそ申ける大治四年七はいりゅう
 - 7 月七日白川院かくれさせ給ひしよりこのかた天しらかわのいん
 - 8 下のことをしるしめす忠ある者をは賞じ給へか

9 りせいたいせいしゆの先規にもたかはすつみあ
(二才)

1 るをもなだめ給ふ大慈大悲の本誓に相かな
2 へり國とみ民やすかりさされは恩光あ
3 たゝかにてらして國土みなゆたか也とくおほく
4 あまねくうるほして人民ことゝくのとな
5 其後保延五年五月十八日美福門院の御
6 腹に近衛院御誕生あり同年八月十七日春
7 宮にたゝせ給ふ永治元年十二月七日御とし
8 三さいにして御即位あり其後先帝を是新
9 院と申上皇をは一院とそ申ける是により

(二ウ)

1 て一院と新院たかひに御心よからす成給ふ同
2 年七月十日上皇鳥羽殿にして御くしおろさ
3 せ給ひけり御とし卅九御よはひいまたおとろへ
4 させ給はされ共宿善うちにもよほし善
5 縁外にあらはれて真実報恩の道に入せ
6 給ふ久壽二年八月に近衛院當顔いまた春
7 のかすみにおとろへさせ給はされ共らんしつ
8 たちまちに秋のきりにをかされ給ぬ御年
9 を思へは十七歳思ひあへさりし御事也一院
(三才)

1 女院の御なげき中〳〵申ををろかなり人間は是
2 老少不定さだまれるならひととはかねて是を
3 しろしめせとも禁中みなくれになり天下〳〵

4 と〳〵くばうぜんたり中印和漢の貴賤昔
5 よりいまにいたるまで親にさきだつ子子にを
6 くるゝおや其數多しといへとも此御なげき程の
7 ためしはむかしも今も承及ばずそも〳〵新
8 院は治三天下十九年の間一天雲はれめいほう
9 のこゑさだかなりしかはいつれの時の誰人か

(三ウ)

1 此御くらひをはかたふけ奉るへきなれ共御弟近
2 衛院の當腹の宮あひしの道をうけとらせた
3 まひしかは是非なく御くらひをおしとらせ給
4 てせめては廿のほうざんをもたもたせ給はずわつ
5 かに十七年の春秋をおくりかねてか様にかくれさ
6 せ給ひけるぞかなしき神武天皇は治三天下一七
7 十六年御壽命一百廿余年也昔は國王の御壽
8 命もかくこそそのひさせ給ひけるに末代こそ心う
9 けれ仏人も壽命の長短不同な〳〵にやしや
(四才)

1 か如來よりはるかのさき照日光如來は御命卅
2 年任無住如來はわつかに一日一夜也月面如來
3 はたゝ一朝に出て夕に入給ひしかはわうじやくの
4 日輪はやくかくれ生死の長夜いよ〳〵ふかかり
5 きまことに本覺常住の仏祖分段の御命をは
6 かうとそ御心にまかせ給はぬ御事なれいはんや我
7 太子近衛院は人皇七十六代にあたり給へり御かと
8 世はまつ世にのそみ位は如來にをとり給へは有

9 待の御身もちを持もちなから無常むじやうのあらしをはいかて
(四ウ)

1 かのかれさせ給ふへきとおほしめしなくさまさり
2 しそつみふかうはおほゆるさては新院しんいんおほしめ
3 しけるは今度こんどの御位みくらひには我御身われみくらひこそかへしつ
4 かせ給はず共一宮重仁親王いちのみやしげのひとしんわうはよものかれさせた
5 まはじと思おもほしめ食くはまうけたりけるに不慮ふりよの外ほかに
6 後白川院ごしろかわのいんの四宮よつみやとてうちこめられてまし／＼
7 けるか御位みくらひにつかせ給ひけり是こゝにて新院しんいんし
8 けひとの御いきとをりふかきしゆそにこそ當たん
9 今いまかくれさせ給ぬれと美福門院びふくもんいんの御いきと

(五オ)

1 をりふかくして内ないと法皇ほうわうにも申させ給ひける
2 とかやさればたかきもいやしきもまことの親子おやこ
3 ならぬ御中程みちかた心こゝろうき御事みことはましまさず久壽きうじゆ
4 二年ふたふたの冬ふゆの比法皇ひほうわうくまのへ御参詣みさんけい有ける證誠せうじやう
5 殿でんの御まへに通夜つうや有て現當げんたう二世にせの御祈精みせいあり所ところと
6 さんけいのきせんへいはくをさゝげたな心をあわせ
7 庭上ていじやうにみちみりて御まへの河波かわなみあらしにたくひて
8 山やまをひゝかし夜深更よしんかに及およでいとゝ御心みこゝろすみわたり
9 こしかた行ゆすゑを御觀法みくわんぽう有けるにねの時ときは
(五ウ)
1 かりに及およてうつゝともなく御夢みむ想む共ともなきに證誠せうじやう
2 殿でんの御ほうでんの御簾みすのすそよりひたりとおほ
3 えてうつくしき御手みてをさし出させ給ひてうち

4 返かへ／＼三度さんどせさせ給ふ御事みことあり法皇ほうわうは御夢みむ
5 想さうさめさせ給ひて人にはかうとおほせられずして
6 ふしぎの事ことと思召おもほせて先達まんだちをめして御心みこゝろにかけ思召おもほせ
7 事ことありきつとらなひ申させはやと仰おほせければ山上さんじやう
8 に本もとは美作みまさかのくに國くにの者ものなりけるか八十やそひゆうよなるいほり
9 のいたとてゆゝしきかんなきありかれをめされて御
(六オ)

1 ふしんの事ことありうらなひ申せと仰おほせければかん
2 なぎあしたよりして權現ごんげんをおろし奉ほうるに日中ひちゆう
3 すくるまておりさせ給はず法皇ほうわうをはしめ奉ほうて
4 供奉くわんぶの人ひとといかなるへき御事みことやらんとて目をす
5 まし心こゝろをしつめておほしけるひつじのかたぶく
6 程ほどに成なて權現ごんげんおりさせ給ふとおほしくてかななき
7 法皇ほうわうにむかひまいらせて左ひだりの手てをさしあけて
8 うち返し是こゝはいかに／＼とそ申ける法皇ほうわうは御覽みらん
9 せられつる御夢想みむさうに少すこもたがはぬ間ま真実まことの
(六ウ)

1 御ごたくせんなりとおほしめされて御座ござをすへらせ
2 給たまて御かうべを地ちにつけたな心を合あはせて申まをところ
3 のふしんはこゝ候まをさていかに候まをへきやらんと申させ給
4 へはかななきまことに心こゝろほそきやうなるけしきにて
5 さうのまなこより涙なみだをなかつて
6 手てにむすぶ水みづにうつれる月つきかけの
7 あるかなきかの世よにもすむかな
8 此哥このうたを二三度さんど詠よじて申けるは君きみはしろしめされ

9 すやみやうねんの秋の比は崩御ならせ給ひて其
(七才)

1 後世中手のうらをかへすかことくなるへしと御た
2 くせん有ければ法皇をはしめ奉てぐぶの人と色
3 をうしなひてあなあさましやははいかなる事
4 そやさていかゝして御壽命延させ給ふへきやらんと
5 申させ給へはかななぎ又申けるは君は我くにのあるし
6 にてまします五十余年をたもたせ給ふ我又此
7 くにの鎮守なり一千余年になるされは利生
8 方便中にあはれまさはなけれ共一業所
9 感の衆生宿執かきり有事には護法の天童

(七ウ)

1 も守護の明神もちから及ぬ事也をよそごくら
2 く不退の地をこそねかひてもねかひますべき
3 にかゝる濁世乱漫の世中に御心をとめてな
4 かはせん今はたゝひとへに後生菩提の御いと
5 み有へきなりとて權現あからせ給ひけり神は明
6 年秋の比とこそしめし給へ共君は只今きへ入やうに
7 そ思召月卿雲客は今又わかれたてまつるやうにそ
8 おもはれける上道にはぐぶの人と王子のなれこ
9 舞つねならぬ旅のよそほいをつかさとりいさみ
(八才)

1 あひてこそ参り給ひしに此御時の御下向には
2 うちしめりたるけしきにて淨衣のそてをし
3 ほりつゝ還御はすでになりにつけり同年の春の

4 ころより主上御不豫の御事まし／＼ければない
5 けに付て様との御いのり有けれ共すこしも其
6 しるしもわたらせ給はす春も過夏もくれぬ秋の
7 なかには及てはいとゝ所せきさま見えさせ給へは何事
8 の御さたにもおよはす八月十五日は駒引とて東國よ
9 り馬をげんず官使あふさかの関にゆきむかひ
(八ウ)

(八ウ)

1 て是をうけ取礼儀ありし事なれとも御悩に
2 よてこれをとゝむ放生會ばかりは恒例の事なれ
3 はとてかたのことくとりおこなはれけれ共南殿の
4 みすもあけられずよろつ物さひしき躰ありこ
5 よひしも御こちみだりがはしく思召けるがみす
6 二三間はかりあけられ雲井の月を多いらんあり
7 をりしも十五夜の月くまもなかりけるに
8 秦旬一千餘里 凜々兮凍鋪
9 漢家三十六宮 澄々兮粉飾

(九才)

1 ゆへある夜半のけしき御らんじすてかたければ
2 わさどにはあらず折ふしまいりあつまりたまへる
3 月卿雲客の中堪能の人をめされて御ゆうあ
4 りけり文詞は詩を献じ哥人は哥を奏すいつ
5 れも祝言ならずといふ事なし其中に御製一
6 首そへられたりあはれにかたしけなくそおほ
7 えし
8 むしのねのよはるのみかはをく露を

9 をしむわか身ぞまづきえぬべき

(九ウ)

- 1 法皇は此御製を御覽してかつうはかんじかつう
- 2 はいまはしくぞ思召けるさる程に 同廿六日のいぬ
- 3 の刻にはつゆにかくれさせ給ひぬ今の近衛院と
- 4 申は是也御とし十七歳をしかるへき御事ぞかし
- 5 法皇はさしもいとをしくかなしき御事におもひ
- 6 まいらせ給ひしかは朝夕は千秋萬歳とこそい
- 7 のり申させ給しにさこそあへなくおほしめしけれ
- 8 まことに有待の御身は高下ことなる事なし無
- 9 常のさかひには利利修陀もきはす妙覺の如來

(十オ)

- 1 因果のことはりをしめし大智の舍利弗も宿世の
 - 2 業をかんず世間の無常今に事なれとも時に
 - 3 とてはあさましかりし御事也法皇は雲の上の
 - 4 うつり行ありさまを御覽するにも權現の
 - 5 御たくせん有し御事おほしめして供御をものはか
 - 6 しくもまいらずつねはよるのおとへのみいらせ
 - 7 まし／＼けりかくて今年は暮ぬつきの年改元
 - 8 有て保元と年と申し春の比より又法皇御
 - 9 なうましますと聞えければ去年近衛院かくれ
- (十ウ)
- 1 させ給ひし御なけきのゆへにやとそ申けるひとかた
 - 2 ならぬ御なけきなりしかは六月十一日美福門院は
 - 3 鳥羽の浄菩提院の御所にて御ぐしおろさせ給ひけ

4 り御戒師にはみただけの觀空上人ぞまいられける法

- 5 皇は目にしたかツてたのみなき様に見えさせ給へ
- 6 は大法秘法のこる所なくおこなはれ術道ぞ
- 7 こをきはめてつとめしかともしるしもわたらせ
- 8 給はすいかなるへき御事やらんとて天下のさは
- 9 きなりさるほどに七月二日つゆに崩御ならせ給ひ

(十一オ)

- 1 ぬ御とし五十四いまた六十にだにもみたさせ
- 2 給はねは是も又をしかるへき御事也一天くらやみ
- 3 となり日月をうしなふがごとし万人のなけき父
- 4 母のにもあへるにことならず釈迦如來しやうし
- 5 やひつめつのはりをしめさんとて二月十五
- 6 夜半に沙羅双樹の下にしてかりに滅度をと
- 7 なへ給ひしに人天大會五十二類非情草木にゐ
- 8 たるまでみなうれへの色をあらはし此秋のはし
- 9 めの二日崩御には月卿雲客かふりのこしを

(十一ウ)

- 1 地につけて直衣のそてをぞしほり給ふちか
- 2 くめしつかひし人とも今はいかなる世にかにうわの
- 3 御こゑをも承へしやとて天にあふき地にうつぶ
- 4 してぞかなしみ給ふまして女院の御なけきなか
- 5 しく申もをろかなりゆかのうへにはむなしき御ふ
- 6 すまのみのこれり御まぐらの下にはいにしへをこふ
- 7 る御なみたもせきあへす南庭に花を御覽すれ
- 8 ともそてをつらねしにほひもなく北苑にむしを

9 きこしめせとも枕をならへし人ともなくされは夜
(十二才)

1 もなかく日もなかくおほしめしける御心のうちこそか
2 なしけれ去 年近衛院の御かくれこそ天下の御な
3 けきなりしに又此御事うちそへていとせんか
4 たなくそおほしめす一年御熊野まうての
5 ときかなきかうらなひ申ける事も少もたが
6 はす其後世中手のうらを返すがごとくなるへし
7 と権現御たくせん有ければのちもいかなる世に
8 かならんと申あひける程に禁中にも物さはかし
9 く仙洞にもさゝやきつゝやゝ事あつて新院

(十二ウ)

1 の御かたのつはものともよるは東三条にあつ
2 まりむほんの事を談じひるは山の上のほ
3 り木のすゑにあかりて内裏高松殿の案内
4 をうかゝひ見るなとゞきこへければ三日下野守
5 義朝に仰て東三条の留主少監物藤原光
6 定以下武士兩三人めしとられぬ昨日二日法皇
7 崩御ならせ給ひぬ今日三日かゝる事の出来ぬ
8 れは後もさこそあらんすらんめなど申あひけ
9 る程に東西南北より武士共みやこへ入あつまり
(十三才)

1 兵具を馬におほせ車につんて入なと聞えけり
2 そもゝ事のらんしやうを尋ぬれば新院
3 と申は故法皇の第一の御子なれば御ゆつり

4 をうけさせ給ひぬ 去保延五年五月十八日美福門
5 院の御はらに近衛院御たんじやうある故院よろ
6 こひおほしめされて同年八月十七日春宮にたゝ
7 せ給ふ永治元年十二月七日三歳にして御即位あ
8 り新院べちの御つゝかもわたらせ給はね共法皇
9 の御はからひなれば新院もちからおよひ給
(十三ウ)

1 はすしかるに近衛院崩御なりぬる上は我御身
2 こそかへしつかせ給はす共一宮重仁親王はよものか
3 れさせ給はしと思召まうけられたりけるに後
4 白河院の四宮とてうちこめられてわたらせ給ひ
5 けるを御くらいにつけ奉らせ給ひけり此四宮と
6 申は待賢門院の御はらにてわたらせ給へは新
7 院とは一腹一性の御兄弟也されは美福門院の御
8 ためにはいつれも御まゝ子にてわたらせ給へとも
9 近衛院のかくれさせ給ひぬるはひとへに新院の
(十四才)

1 しゆそしたてまつらせ給ふゆへにこそと女院
2 の御うらみふかくして内と法皇にもとり申させ
3 給ひしかは新院の御うらみふかゝりしかとも法皇
4 御存生のあひたなればちからをよはせ給はず
5 しかるにいま近衛院の世をはやくさらぬれ
6 はうけさるゆへなり此時にあたりて重仁
7 親王は嫡と正統たりもつとも其人たるをさし
8 をきて員外なる四宮にくらいをうははれて

9 めんほくをうしなふ事こそやすからねとそ

(十四ウ)

- 1 おほしめされける君と／＼の御事かくのごとし
臣と／＼の御中又不快也其故は當閑 白忠通
- 2 公と申は宇治禪定 殿下の御嫡子又宇治大
臣頼長と申は禪定殿下の二男閑白殿の御
- 3 弟御兄 弟のうへ父子の契約まし／＼ければ
- 4 礼儀ふかゝりけるかたちまち御中あしくならせ
- 5 給ふ其ゆへは宇治左大臣殿と申は禪定殿下の
- 6 御あいしにてまし／＼ければ禪定殿下の御は
- 7 からひととして 去 久安六年九月廿六日兄閑白殿

(十五才)

- 1 をさしをきて宇治の長者に補せらる翌年
- 2 仁平元年正月十日万機内覧の宣旨をかう
- 3 ふうらせ給ひて天下の大事をきこしめすゆへ也
- 4 およそ攝政閑白の外に執柄の人あひならぶ
- 5 事希代の例也とそ申けるされは閑白殿は
- 6 攝祿の名はかりにて天下の事をはしるしめ
- 7 されすこゝに閑白殿いきとをり申させ給ひ
- 8 けるは先祖忠仁公よりこのかた内覧の長者
- 9 を攝政攝祿につけらるゝは旧例なりしか

(十五ウ)

- 1 るを忠通執権の時にあたりて兩 職を左符
- 2 にうはゝれてめんほくをこしなふのみならず
- 3 してそしりを後代にのこすしかればすなはち左

4 符「マ」の執権によりてしんくわをかへさるへくんは忠通

- 5 がしへうをとめられて閑白を左符「マ」につけらるゝ
- 6 かしからすんは内覧代の長者を閑白に付らるゝ
- 7 か此兩 様天裁にありとしきりにいきとをり申
- 8 させ給へは主上まことに此事ことほりなりと
- 9 思召けれ共禪定殿下の御はからひなればちから

(十六才)

- 1 をよはせ給はすおよそ此左大臣殿も天下の事
- 2 をしるしめさんにふそくなる人にてはましまさず
- 3 和漢の礼義をととのへ自他の記録にくらからず
- 4 諸道の淺深をさくり万機の輔として親疎な
- 5 く朝家の重寶攝祿の臣たる御事よとそ聞
- 6 えけるされは閑白殿下の 詩 哥に長じ御手跡
- 7 のうつくしくまし／＼けるをも左大臣殿はそね
- 8 みてけり詩哥これ閑中のおそひ物かならず朝
- 9 儀のよういにあらず手跡は又一旦の興也賢人

(十六ウ)

- 1 是をたしなますとて我身はむねと五經を
- 2 まなび仁義礼智信をたゝしくし給ふ節會除
- 3 目官奏かやうの時もたま／＼御ことはあやま
- 4 りもある時はいかりき怠状をあそはして職
- 5 事弁官に是をたふあやしのとねりうしかひ
- 6 にいたるまで御勘氣をかうふる時つみなきよ
- 7 しをちんし申せは細くは是をきこしめしてまこ
- 8 とつみなければ御こうくわいありけりおよそ理非

9 めいさつにして諸事きりとをしにまし／＼ければ
(十七才)

1 悪左大臣殿とそ申ける御奉公も格別也関白殿
2 は大内に御祇候有左大臣殿は引ちかへて仙洞に
3 御参ありけり左大臣殿 思召けるは内裏へまいり
4 たりとても関白殿さておはしませは関白殿をもさ
5 しをきて攝政攝祿せん事不定也此時新院
6 の御代になしまいらせて関白殿をおしこめ奉り
7 て世を我まゝにとりおこなはんとそ思召ける新
8 院又思召けるは我十善のよくんつきざるによて
9 万乗のくらいにいたるしかるに一たんのてうあひ
(十七ウ)

1 によて累代の正統をさしをかれて父子共にう
2 れへをふくむされとも法皇御存日のあひた
3 なれはちからおよはす一兩年の春秋をくくる今
4 更斉明稱徳二代のあとをおひふたゝひ帝にそ
5 なはるかしからすはくらしいを重仁にゆつり奉て政務
6 にのそむか此時世をうばはんにあに天命にもそ
7 むきしんほうにもそむかんや此条いかと仰ら
8 れければ左大臣とのまことおほしめしたつとこ
9 ろもつとも御りうんたるへく候天のあたふるをう
(十八才)

1 けとらざるはかへつて其とがありと申候故
2 院の崩御なりぬるをもつて時いたれる事
3 をしる此時思召たち候はてはいつをかごしまし

4 /＼候へきもつともめてたき御はからひなり
とそ申されける君と臣との御中かゝりしかは

5 源平兩家のつはもの共あるひは親のめいをそむき
6 或は兄弟のよしみをわすれて思ひ／＼心に引わか
7 る日本國大略二に引わかれぬ内裏の事をこない
8 は関白殿仙洞の事おこなひは左大臣殿内裏
9 (十八ウ)

1 の大將軍は下野守義朝安藝守清盛仙洞の大
2 將軍は六条判官為義よしともがち／＼也へいまのす
3 けたゝまさはきよもりかおぢ也上といひ下と云源
4 平兩家いづれも勝劣あるへしともおほえすい
5 くさのならひ一方はまけ一方はかつせうぶかね
6 てしりがたしたゝ御くわほうのせうれつにより
7 御うんめいのよはきつよきによるへしとそ申け
8 る新院の當時の御所は鳥羽の田中殿也故院此
9 御所にて崩御なりしかは今御ちういん也新院
(十九才)

1 京へ御出あるへしと聞えければ何と聞わけたる
2 事はなかりしかともきせん上下あはてさはき
3 資財雑具を東西南北へはこひかへし上下安
4 堵のおもひもなかりけり法皇崩御ならせ給はず
5 はたゝいまかゝる事有へしやとたかきもいやしきも
6 なけきあふ同五日少納言入道しんせいせんしを
7 承て權非違使共をめしてせき／＼へわかちつか
8 はす宇治路へはあきのはんくわんむねもりよと

9 ちへはすわうのはんくわんすゑさねあわたくちへは
(十九ウ)

1 おきのはんくわん惟俊くらまちへはへいはんくわ
2 む実友大江山へは新遠江はんくわん助俊をの
3 洞へまいらんするものをはめしとるへきよし仰ふ
4 くめらる今夕関白殿大宮大納言伊通卿さんだ
5 して議定あり東宮大夫宗能内裏よりめ
6 されけれ共鳥羽殿へ参てさんせす六日あき
7 のはんくわん宗盛宇治はし守護のために三
8 百余騎にて大和大路南へむけてあゆませゆ
9 (二十才)

1 程に法性寺の一橋の程にて誰とはしらす世
2 騎はかりある勢のあつきよげなるかひたかぶと
3 にてつと行あひたりあきのはんくわんいつこんそ
4 めのきぬに白をのかりきぬにくろいとおとしのよ
5 ろひにくろき馬にくろくらをいてのつたりけり
6 弓とりなをし三百余騎がおもてにあゆませ出
7 て此程みやこにむほんの聞え候によつて方とよ
8 りつはものとも入あつまり候よし聞え候間みち
9 へ權非違使等をつかはされ候也是は宇治
(二十ウ)

1 はし守護のためにまかりむかひ候かう申は桓武
2 天皇より十三代の後胤刑部卿忠盛か孫あきの
3 かみきよもりか二男あきのはんくわんむねもりと

4 なのるたゝ今のほる勢の中に大將軍とおほしきか
5 ちちんやらんめゆいやらん色めは見えすくるぼうた
6 るひたゝれに小さくらを黄に返たるよるひにくろ
7 つはの矢の廿四さしたるかしらたかにおひなしぬり
8 こめ藤の弓のにきりふとなるにきかはらけなる馬
9 のふとくたくましきに白ふくりんのくらをいて
(二十一才)

1 そのりたりける世よきかまつさきにあゆませい
2 てゝゆみとりなをして御なはたしかにうけ給候ぬ
3 是は清和天王より十代のこういん攝津守頼光
4 か弟やまとのかみ頼親が三代の孫中務丞頼治が
5 孫下野守親弘がちやくしうのゝ七郎親治と名
6 のるあきのはんくわん宗盛それは宣旨によつて
7 上落か院宣によつて御上落か其段承候はんといふ
8 ちかはるいかゝ思けん矢たはね引ときをしくつ
9 ろけてしはらく物をあんしたるけしきにて
(二十一ウ)

1 ひかへたるかどやいはまじかうやいはましとあんし
2 けるか内裏へ参候といひてこゝをやのかれて子細
3 なくとをり又本の儀なれは仙洞へ参といひて
4 こゝをや思ひきるいかゝいはましとあんしけるか弓
5 矢とるならひかりにもいつわりたる事は後代
6 のはぢなる物と思て是は去比より左大臣殿
7 御承にて仙洞へまいり候あきのはんくわんかたきと
8 きゝなしてはへいれい引入てかぶとをき緒をし

9 め弓とりなをしつゝ立たちあかッ上あてさてはえこそとをし

(二十二才)

- 1 申まうましけれぢたいは王土わうどにすみながら朝敵てうてきと
- 2 はなるましき物にて候あそおりみの院宣いんせんにした
- 3 かッてせんとうへまいられ候はんよりはことなきさま
- 4 にてすみやかにだいらへまいられ候へし宇野うの
- 5 七郎しちらう是こそはんくわんのことはともおほえぬ
- 6 左大臣殿さだちじんの御うけたまはりにて仙洞せんどうへまいら
- 7 むするものか御へんの口入くちいれにて内裏だいりへ参てし
- 8 うふたりはもつましきものを弓やとるものゝ一度たひ
- 9 申まうつる事をへんするやうやあるやまとのくに

(二十二ウ)

- 1 おくおくのこほりに居住きやうぢゆうしていまた武勇ぶゆうの名を
- 2 おとさす今はかうそや思おもひきれとて卅余騎よそよきくつ
- 3 はみをならへて三百よきか中へをめていかけ
- 4 入いとをらんとをさじからめうからめられじと
- 5 する程ほどに一時はかりぞたゝかふたる三十余騎よそよきを
- 6 三百余騎よそよきか中にをッとりこめたれはいつく
- 7 にかたきか有ともおほえす宇のゝ七郎しちらうは馬は
- 8 はづみかゝりたりひまもあらはかけやぶてと
- 9 をりぬとそ見えしさる程ほどに法性寺ほうじやうじの一橋いに違

(二十三才)

- 1 勅ちよくのものありときこえければ内裏だいりへ参あつまる我
- 2 も／＼とはせあツまりあきのはんくわん宗盛むねもりか
- 3 勢せい一千余騎せんよそよきにそ成なりにけるあきのはんくわんはたか

- 4 き所にうちあかッてゆんつえつきつゝ立たちあかり
- 5 てわうじもろき事なし一人もあますなみなからめ
- 6 とれやとぞ下知げちしけるうのゝ七郎しちらうはもとより無ぶ
- 7 勢せいなりけるかあるひはうたれあるひはをちゆき
- 8 ければわづかに十余騎よそよきにそなりにけるをし
- 9 ならへてくんでをつれば一騎よそよきかうへに五騎ごき十

(二十三ウ)

- 1 騎よそよきをちかさなりければうのゝ七郎しちらう心はかうな
- 2 れどもちからおよはす無勢ぶせいなれはいけとられ
- 3 てげり其日の暮くれほとにいけとりぐして返り
- 4 まいるけしきあたりをはらてぞ見えし少せうと
- 5 めしとられてきんごくせらる頭中とうちゆう将公しやうこう通とに仰おほせて
- 6 宗盛むねもり正下しやうげの五位ごいにふせらるきゝ書かきのちうには
- 7 うのゝ七郎しちらう親治おんちやうついたうの勸くわん賞しやうによッてとそ
- 8 のせられたる時にとてめんぼくとぞ見えし新しん
- 9 院いんは此事このこときこしめしていとゝやすからずぞ思召おもひめし

(二十四才)

- 1 ける(以下、つづく。)

(広島大学日本語史研究会)